

湖上防備定住地アーライシ - ラトヴィア初期社会における定住の一類型 -

市原 宏一

今日バルト三国が位置するバルト海北東岸は、ドイツ人らによる東方植民以前には、北部のフィン人、中・南部のバルト人という、二つの人種に大まかに分かれていた。このうち現在のラトヴィアはさらに、北部のリーブ人、バルト海沿岸のクール人、中部のラトガレ人らに分かれた。ドイツ人らの入植以前の社会は、鉄器時代と区分され、文献史料には乏しいが、考古学資料によってその様態が推定されている。ラトガレ人地域に属する、ラトビア北部、ヴィドツェメ地方の湖からは10の湖上定住地が発見された。このうち、アーライシ湖では既に、考古学遺跡として19世紀には確認されており、また、湖に沈んだ砦集落についてのいくつかの民話が伝承されてきている。この民話では、ある時空から大量の水が降り注ぎ、下にあったもの全て、砦も、家も、人も動物も水で覆ってしまった、とされている。こうした民話や、表面調査を背景に、1965年以降水中考古学を含む集中的な調査が行われた。この結果、2500平方メートルに及ぶ遺跡のほぼ全体、四分之三が発掘され、その成果に基づき、1992年から復元野外博物館が開かれている。今回私たちは、ラトヴィアにおける日程の第5日目に、滞在地リガから北東約70km離れている当地に赴き、ほぼ一日をかけて見学調査した。

アーライシ湖は東西に一辺約1kmの逆三角形をしており、湖北西端、岸から50m程離れた島上に防備定住地が設けられていた。定住層は5層からなり、炭素同位元素法により、第1層が830年頃、第4層の建造物は890年頃と編年され、9～10世紀の定住地と考えられ。各施設は面積25×35mの格子状に組んだ丸太土台の上に設けられており、これにより定住地は水上に1m以上高められていた。住居全体の外周と内周に通路があり、これら内と外の周回路をつなぐ細い路地もおかれた。定住地外周の通路は回廊状になっており、入口にも特別な施設がおかれて、防備施設の機能を果たしていた。岸との接続は、自然にできた砂州を木造の堤で強化した通路で、防備定住地の南西隅の入口へと接続していた。

定住地全体で150棟の施設址が見つかっており、第1層には28建物址が属した。1～3間、2.7×3.5～4.5×5mと小規模で、中央に暖房ないし乾燥用炉があることから、住居と見なされる。各住居には床板がなく、また、土間やたたきにもなっておらず、樹皮のついたままのトウヒないし白樺丸太がそのまま床となっていた。建物は丸太組で、水平に列べた丸太壁の上下を横木で挟み固定し、いわばかすがいのような工法となっている。丸太組は同時期のスラヴ人にもよく知られた建築法であるが、かすがいのような建築法はとっておらず、一千年以前のバルト諸族の住居の典型、とされている。

出土した遺物からは、農耕、牧畜、狩猟・漁労、養蜂、手工業など多様な生産活動が行われていたことが推定されるが、交易なども行われていたと推定されているものの、特に高い技術を推定させるものは出土していない。ここでの社会構成は、氏族社会と見なされ、複数の家族から構成されていたとされている。さらに、ある程度の社会分化も推定されており、氏族長老に指揮監督された社会と見なされている。ただし、こうした推定についての根拠が明らかにされているわけではない。

この定住地は、外敵の襲来により破壊された後に、放棄され、その後気候変動で湖水面が少なくとも1m以上上昇し、水没したと考えられている。周辺では、湖北東に同時期からその後にかけての墓地が見つかるが、さらに後、ドイツ人による東方植民期、14～17世紀に、湖上定住地に面するように、石造り城が設けられている。石城の西側には塁壁前定住地があり、出土した装飾品や農具から、ドイツ人騎士団支配期の石城ではあるが、住人のかなりの部分が当地の上層であったと推定された。アーライシ湖近隣は、今日では、北岸に教会を中心とした小集落があるだけだが、前近代を通じて地域拠点となるような、立地条件が存在していたと考えられる。

アーライシ型の防備定住地はラトガレ人、さらにはバルト人においても支配的類型とはいえない。9・10世紀以降、ドイツ人らの東方植民まで、ラトヴィアにおいては、土と木で建築された丘状の防備定住地が100例も見いだされる。類例は東欧全体でもよく知られており、先行して中世前期のスラヴ人定住地域では木と土からなる防備施設は一般的である。ただし、スラヴ人の場合は必ずしもマウンド状に盛り上げたり、高地に設営されているとは限らず、低湿地に設けられることもあった。

他方で、アーライシと同様に、定住地全体を水面よりも嵩上げた湖上定住地は、西欧でも既にかなり早期に鉄器時代から存在したことが知られている。東欧においても、低湿地防備定住地の中には、湖島上定住地は必ずしもまれな存在ではない。しかし、スラヴ人の場合には、湖島や半島上の例はあるが、アーライシのように、建物の土台自体が人工的な木造建造物である事例はきわめてまれである。特に、バルト人を囲むように隣接するスラヴ人においては、竪穴建築の際の土間やたたきなど、土の上での住居生活を基本としていた。従って、湖島定住地の場合でも、陸地としての湖島を利用したのであって、特に人工の土台を設け、そこにじかに住居を設ける方法はとっていない。ラトヴィアには、アーライシ型の湖上定住地が十例も集中しており、バルト諸族の定住史上の重要な特徴の一つとして位置づけられる。

類（斧、槌、小型ナイフ、鋏、ピンセット、砥石、鎖）が確認されている。他にはゲームの駒、ガラス製ビーズ、バケツなどがあり、日常生活に関するものも豊富にみられる。ヴァルスイエーデの出土品もほぼ同様の構成であり⁴、武器類の多さを特徴として挙げられる。ヴァルスイエーデは比較的遅い時期に全域が調査されており、またここはあきらかに盗掘を受けていないため、資料としての確度は高い。この点、ヴェンデルと状況を異にする。

両船葬墓域の年代については見解が分かれている⁵。たとえば、ヴェンデルに関しては、その時間的範囲をそれぞれ520年～750年・600年～720年・575年～800年とする研究がある。ヴァルスイエーデの船葬墓も、研究によってやや幅はあるが、ほぼ同時期に属するものとされている。

合わせても30基ほどにしかならないこれらの船葬墓域が代表的な遺跡としてあつかわれていることからわかるように、船葬という葬制は通常の埋葬方法から大きく「逸脱」した「例外⁶」である。先史時代より人口分布の中心であったスウェーデンのメーラル地方（現ストックホルム県周辺）でさえ、上の2墓域をのぞくと、他にはアルシケのトゥーナ（3基）、ウルトゥーナ（3基）、バーデルンダのトゥーナ（8基）、シェーピングのノシャ（15基）、ガムラ・ウップサーラ（4基）などしかない⁷。同時代に生きた大多数の人々の墓は簡素な火葬墓であるから、副葬品の豊かな船葬墓域⁸には社会のある階層のごく一部の人々だけが葬られたと考えられている。

船葬墓をめぐる議論

このような船葬墓域が造営された歴史的・社会的背景はいかに理解されるであろうか。これらの船葬墓（域）そのものの解釈は、発見直後からさまざまな方面よりなされてきた⁹。ヴェンデルの船葬墓群が発見され、それが唯一の知られた船葬墓群であった20世紀初頭、その被葬者はスヴェーアの諸王とされ、多分に伝説的なイングリング王家と関連づけられた。その後、ヴァルスイエーデなどが発掘されると、被葬者は「大農民」や「豪族」、「海軍役制度 *ledung*」の「下級指揮官」な

⁴ Arwidsson, Greta, "Valsgårde", in Lamm, J.P., Nordström, H.-A. (eds.), *Vendel Period Studies*, Stockholm, 1983, p.75, id. *Die gräberfunde von Valsgårde I, Valsgårde 6*, Uppsala, 1942, id. *Die gräberfunde von Valsgårde II, Valsgårde 8*, Uppsala, 1954

⁵ Müller-Wille, Michael, "Boat-graves, Old and New Views", in Crumlin-Pedersen, Ole et al (eds.), *The Ship as Symbol in Prehistoric and Medieval Scandinavia*, PNM 1, Copenhagen, 1995, p.105

⁶ Ambrosiani, Björn, "Vendeltid", i *Vendeltid*, s.8

⁷ 他に、1, 2基以下だけからなる船葬墓（域）が7カ所、計8基ある。

⁸ 舟を一艘副葬すること自体が「豊かさ」を示している。

⁹ Norr, Svante / Sundkvist, Anneli, "Valsgårde Revisited, Fieldwork Resumed after 40 Years", *Tor*, 27-2, 1995, p.407f.

ど、王よりも一段下の社会階層に比定されるようになる。現在では、さらに、政治的・宗教的中心地だったと考えられているトゥーナ地名と船葬墓地の関係や、サットン・フーなど、イングランド・大陸の船葬墓との関連も意識されるようになり、船葬墓域をめぐる問題の総体を統一的に咀嚼・理解することは非常に困難な状況である。

それでも、これらの議論の中から船葬墓という現象について説明を与える主要な学説を抽出するなら、主要なものとして以下の二つを挙げることができる。一つは「船葬」に宗教的意識のあらわれをみるもの、一つは（社会）経済的な背景をみるものである。

北欧神話には、神々と水系の関連づけを可能にするような要素が多々含まれているが、それに関連して船葬墓造営の動機を宗教的意識にみるのが前者の理解である。たとえば、『エッダ』において、ニョルズ神の居所は Nóatún (=船-農場) と呼ばれ、寄港地かつ越冬地であったとされている。ニョルズは海の風・航行・漁・商業の神であり、サガではとくに船と河川航行の守り神としてあらわれる。ニョルズの子フレイも馬・猪にくわえて船をその象徴とし、「すべての神をのせられる船」をもっている。伝説的な『イングリング・サガ』第9-10章によれば、オージンの死後スウェーデン人たちの中で権力を握ったニョルズは王と呼ばれた。さらにそのニョルズのあとを継いで同じくスウェーデン人の王と呼ばれたフレイ（別名イングヴィ）はウップサーラを居所としてそこに神殿をたて、イングリング王家の祖となった。ウップランド、なかでもウップサーラ近郊に船葬墓が集中しているのには、以上のような事情と、それに由来するフレイ信仰がメーラル地域で特別な意味をもっていたこと、ガムラ・ウップサーラにおいて王権が成長しはじめたこと関連があるとされるのである¹⁰。この理解にもとづくなら、船葬墓は宗教的行為を媒介として、自らを神々と正統な権力（王家）に結びつけるものとして機能していたことになる。

もう一方の説においてはまったく別の方向から船葬墓が解釈される¹¹。船葬墓が出現するヴェンデル時代からヴァイキング時代末期（鉄器時代末期）は急速に定住地が増えた時期であることを念頭におくと、船葬墓群は定住（人口）中心地には位置していないことが容易にみてとれる。つまり、人口中心地と森林地帯の境界に近いところに船葬墓群は分布しており、船葬は「周辺の現象」である。したがって船葬墓を生みだした定住地は、ヴェストマンランドや西ウップランドの比較的新しい「開拓地」であり、スヴェーア人の軍事的・政治的指導者の拠点であったとは考えられないのである。そのような「社会的機能」は定住中心地にみられるべきものである。そこで船葬墓の背景にあるとされるのが、非定住地域である森

¹⁰Schönbäck, Bengt, "Båtgravskicket", i *Vendeltid*, s.108-22

¹¹Ambrosiani, Björn, "Background to the boat-graves of Mälaren valley", *Vendel Period Studies*, pp.17-30

林を舞台にした鉄・毛皮・枝角等、原材料品の採取・生産と手工業・商業であり、これらの活動が船葬墓の副葬品の豊かさに説明を与えてくれる。

船葬墓再論

上の2学説を中心に船葬墓という現象について考えなおしてみる。まず、宗教的な背景、異教信仰をみる説は、神話的内容の叙述史料を正面から扱ってしまっていること、たとえばイングリング王家（に相当する王家）をほぼ実在するものと前提しているという難点がある。また「信仰」は船葬墓が作られた「動機」を明らかにしているが、なぜ現在知られている場所に、現在知られているような船葬墓域が形成されたのかを説明しない。習慣的に「王の塚」とよばれている大墳墓に船葬でないものが多いのはなぜか。鉄器時代後期の墓のほとんどをしめる簡素な墓に、豪華な副葬は無理であるとしても、「船葬」しようとした痕跡がないのはなぜか¹²。これらのことを説明しない。現在に残る叙述史料との整合性が高い理論ではあるが、全面的には受け入れ困難な考えである。

背景に商業をみる考え方の中心には、船葬墓が定住のなされていない森林地帯近くに位置すること、周辺の現象であることがある。しかし、政治的・宗教的中心であったことを否定しないならば、大墳丘墓を有するガムラ・ウップサーラの位置づけに困難をきたす¹³。ヴァルスイエーデからガムラ・ウップサーラまで、早い馬なら15分で行く距離といわれる。経済的資源を支配しながら、政治的・軍事的指導者にならないということも考えにくい。政治的・軍事的優位の確立・維持のためには、経済的資源の支配が必要となるだろうし、「軍事力」がなければ資源の獲得や、運搬路をヴァイキング行為から確保することは困難だったはずである。

これらの研究においてはとくに注目されていないが、ヴェンデル、ヴァルスイエーデの船葬墓群には以下のような特徴があり、ソーヤーが注意を喚起している¹⁴。たとえば、前述のように、長期間にわたってとぎれることなく、船葬がおこなわれ続けたにも関わらず、船葬墓の総数が少ないことである。その数はほぼ一世代あたり一基である。その間、船葬の様式はほとんど変化していない。また豪華な副葬品は早い時期の墓に多く、800年前後を境として副葬品の「質」は下がっていく（兜、槍、太刀等が副葬されなくなる）。しかし、初期の「豪華」な副葬品、とくに武器は実用性に欠けるものが多く¹⁵、副葬品の「質低下」にともなって逆に実用性の

¹²もっとも、船葬墓はヴァルスイエーデ等のような土葬船葬に限らず、とくにヴァイキング時代に広く使われた小舟（鉄釘がほとんど使用されていない）が火葬船葬に用いられた場合、ほとんど痕跡が残らないから、船葬の分布は過小評価されている可能性もある。また「船葬」には物理的痕跡を残さない非火葬水上船葬、火葬水上船葬もありうるため、問題は一層複雑である。

¹³Norr / Sundkvist, *op.cit.* p.408

¹⁴Sawyer, Peter, *Kings and Vikings*, 1982, London, p.50

¹⁵Arwidsson, Greta, "Valsgärde", *Vendel Period Studies*, p.72f.

高いものが副葬されるようになる。同時期、ごく少数であるが、被葬者に女性があらわれるという変化もある。仮に「商業背景説」にそって考えてみるなら、この副葬品の変化は商業の「収益」悪化を示すものであり、「異教信仰背景説」ならば、信仰が変化したということになる。

ウップランドにおける船葬墓の歴史的な位置について考える場合、墳丘墓との関係でみるのが有益である。社会の「上層」には、船葬墓を選んだグループと墳丘墓を選んだグループがあったわけであるが、その違いはどこにあるのだろうか。ヴェンデルなどの船葬墓とガムラ・ウプーラなどの大墳丘墓とのもっとも大きな差異は、造営に要する労働力と造営後の外観にある。労働コストの高い墳丘墓が、ある人々によって好んで作られたのは、完成後に墳丘墓が果たしうるモニュメンタルな機能を期待できたためである。墳丘墓は大きいほど目立ち、被葬者の記憶とその埋葬・継承者の権力が保たれることに寄与する。これに対し、船葬墓は完成後に墳丘墓のような機能をもつことを期待できない。ヴェンデルは完全な平地にあるし（そのため発見が遅れた）、ヴァルスイエーデはやや小高いところにあるものの、遠目には単なる丘と区別がつかない。つまり船葬墓は、副葬という形をとった「投資」とその効果のあいだに大きな差があるように思えるのである。しかしこれは、考古資料にはあらわれない部分、船葬墓への埋葬過程に注目することで理解への糸口がえられる問題である。船葬墓への埋葬がなされる際、その場で大がかりなセレモニーがおこなわれたことに疑問を差しはさむ余地はないであろう。具体的な状況を直接教えてくれる史料はないが、たとえば10世紀初め、アラブ人イブン・ファドラーンがブルガールで目撃した、「ルーシ」の首長の船葬（火葬墳丘の船葬墓）の記録からイメージをえられる。埋葬に先立って生贄などを伴う葬礼をおこない、それを参列者（地域社会）に「みせる」こと、威信行為が船葬墓造営の主目的であったと考えれば、船葬墓の特異な副葬品や、政治的モニュメントとしての機能の欠如は理由のあることとして理解可能である。こう考えるなら、副葬品の質の低下は、副葬の必要、すなわちセレモニーの「規模」をそれまでと同等の水準に維持する必要がなくなったこと、威信行為的な散財の必要性が減少したことを意味し、ほぼ一世代につき一基という船葬墓の数は、船葬に伴うセレモニーが、代替わり（財産・社会的威信の相続・継承¹⁶）に際しておこなわれた回数であると解釈できる¹⁷。そうすれば、世代／一人という墓の低い「密度」も十分納得がいくものである。このように、船葬墓を、その造営に伴う政治的な「セレ

¹⁶ 豪華な副葬品の多くには著しい摩耗や修理のあとがみられ、被葬者が死の直前まで実用に供していたとは考えにくいようである。つまりサガにあるような、一族の財産として伝えられた宝の一部が副葬品とされた可能性がある。そうであるなら、船葬墓には被葬者個人を弔うという要素が少ないと言えそうである。Arwidsson, Greta, *op. cit.*

¹⁷ ソーヤーは、被葬者に女性、子供が例外的であれ存在することは、船葬墓域が、地縁的ではない特定の親族集団によって維持されたことを意味すると考えている。Sawyer, Peter, "Settlement and power among the Svear in the Vendel period", *Vendel Period Studies*, p.116f.

モニー」を主たる機能とする埋葬様式として理解する方法は、ウップランド以外、とくに南スカンディナヴィアの船葬墓研究にも資するのではないかと思われる。